

編集後記

- 春は別れと出会いの季節である。今年も卒業生と追い出しコンパで涙の別れをし、今まさに新人勧誘の真最中。本号がお手元に届く頃には、フレッシュマンを迎えての新人合宿が終わっているはずである。多くの元気な新人が入部してくれることを祈りつつ。
- 誰もが、幾つ何十歳になろうとも、ふと思い出して、懐かしい感懐に浸れる記憶がある。セピア色になってはいるが、決して消えてしまうことはない。航空部生活を通じたことであれば、きっと共感を呼ぶに違いない。多くの原稿が集まるだろう。そのような思いから、全翔友に、特集「忘れ得ぬあのシーン、あの言葉」というテーマで原稿を募集した。結果、4名の会員からご寄稿頂いたが、これでは、「特集」としての扱いにならない。編集長として、訴える力量の無さを痛感している。
- それに比べて、現役部員からは、ここ最近に無く沢山の原稿が集まった。うれしい限りである。(速見さんが追い出しコンパや総会後の懇親会などで、「翔友に原稿を出せよ」と督励してくれたお陰である。感謝。…速見さんの影響力や恐るべし！)
今年、実に久方ぶりに東海・関西で準優勝し、全国へ駒をすすめた。この盛り上がりだが、ここにも現れている。卒業生達の文章には、部と仲間への惜別と感謝と共に、部を盛り立てる努力をした自負があって清々しい。一方、在校生の文章には、「部」に部として受け継がれているべき知識も経験も皆無の中から立上がり、ようやくの所まで漕ぎ着けた喜びと気概がしっかりと読み取れる。そして、現状を良く認識し、決して満足していないことが嬉しい。長かった低迷から脱したと信じてもいいだろう。この勢いを持続して、今年3月、妻沼に置いてきた忘れ物を来年全員で取りに行こう。
- 「航空部便り」のコーナーを「BOX 便り」と改めた。どうも、この方が座りが良いように思えたので。
- 非力非才を省みず、X号から携わった編集も本号(XXII)で12年になった。そろそろ「交代したい」と二、三の方に愚痴をこぼしたら、逆に励まされてしまい、そのお言葉に力づけられて、今年も何とか発行することが出来た。ご寄稿頂いた諸兄に深謝するのみ。
- 一つ気になっていることがある。本誌のバックナンバーはアラビア数字で表記している。1号の50年史に始まってXXIIまで来た。このままの表記でゆくとなると、その内、XXVIIやXXXIIIや、やがてはXXXXIXなどという長い羅列になるが、いいのかな？
——— そこまで続いて欲しいものである。

翔友 XXII <非売品> 編集 翔友会
平成 19 年 6 月 1 日 発行 同志社大学体育会航空部
印刷 河北印刷株式会社
京都市南区唐橋門脇町28番地
